令和６年（2024年）８月３０日

れきみん

資料館だより

No.　Ⅲ－４７

相生市立歴史民俗資料館

TEL（FAX）：0791-23-2961　E-mail：aioi-rekishi-minzoku@vesta.ocn.ne.jp

〈資料紹介２９〉陸・構谷２号墳出土装身具

本年６月と７月に、平井　漠（ひろし）氏(故人)所蔵の多くの資料を、ご子息の平井常満氏から寄贈していただきました。書籍の多くは、すでに開架し、来館者に利用されています。

平成29年（2017年）10月寄贈の陸（くが）・構谷（かまえだに）２号墳出土須恵器３点(杯身2・高杯1)についてはすでに紹介しましたが（『れきみん　資料館だより』Ⅲ－12(2018.4.3)）、この度の寄贈資料の中に同古墳出土装身具が含まれていましたので、追加報告したいと思います。

同古墳出土資料については、旧相生市史（高田1960）に「高杯、つぼ、ていへい、杯（つき）、平瓶（ひらべ）、金環、水晶切子玉（すいしょうきりこだま）、小玉、剣」とあり、それらしい写真［写真１］も残されていましが、先に紹介した須恵器以外の資料の所在は不明でした。しかし、寄贈資料が入っていた封筒には「相生市陸　構谷（通称小谷）　昭和三十年一月三十日採取　耳輪と玉」と記され、旧市史の記述や写真と照らして、構谷２号墳出土資料に間違いないようです。

写真１　構谷２号墳出土資料を撮影したと思われる

写真　平井　漠氏撮影　前回報告の須恵器、今回報告の耳環・ガラス小玉が確認できる

耳環２点［写真２］

２点はほぼ同形・同大で、対をなすものです。銅地金（どうじがね）に鍍金（めっき）した優品で、重さはそれぞれ6.9g・7.4gあります。ほとんど銹化（しゅうか）は認められず、眩（まばゆ）いほど黄金色に輝いています。

環径は、上下で23.6mm、左右で24.9mmを測ります。環身は中細で、径4.2～4.5mmを測りますが、明瞭な稜（りょう）が見られ、断面は六角形状を呈しています。

写真２　構谷２号墳出土耳環　原寸

水晶製切子玉５点［写真３］

すべて６面カットで、片方向から穿孔（せんこう）されています。大きさは若干ばらつきがあり、長さ14.6～16.9mm、中央稜部の幅12.2～13.7mm、孔径は上部で2.7～3.3mm、下部で0.9～1.4

写真３　構谷２号墳出土水晶製切子玉　原寸

mmを測ります。重さは平均すると３gほどです。

ガラス小玉13点［写真４］

13点のうち、１点は径8.7mm、厚さ5.9mmのやや大きなものですが、他は径3.7～5.1mm、厚さ2.1～3.9mmの小さなものです。色調は濃紺色３点、紺色２点、透明感のある紺色１点、透明感のある青緑色２点、緑色３点、淡緑色１点、黄緑色１点と多様です。

写真４　ガラス小玉　原寸

被葬者を飾る装身具

構谷２号墳は、横穴式石室を有する径10m余りの小古墳です。出土須恵器からみて６世紀第４四半期ごろに築造されたと考えられます。

紹介した資料は被葬者（ひそうしや）が身に着けていた装身具で、玉類は首飾りとみられます。副葬品の全容は詳らかではありませんが、小古墳の被葬者であっても、耳や首を耳環や玉類で飾っていたことがわかります。とはいえ、これらの装身具は誰もが入手・所持できるものではなく、被葬者は一定の地位階層にあり、政治・経済的な役割を担った有力家長層であったと推測されます。

耳環と鍍金

ところで、現在、「めっき（鍍金）」という言葉には、安物（やすもの）、偽物（にせもの）といったイメージがありますが、６世紀の鍍金技法というのはそんな軽くいいかげんなものではなく、５世紀に朝鮮半島から日本列島（倭国（わこく））にやって来た渡来人集団がもたらした高度な技術でした。馬具や武器、装身具などに使われましたが、６世紀後半以降、横穴式石室を有する群集小古墳の盛行に伴って、銅地金に鍍金した銅芯金張（どうしんきんば）りの耳環が普及したようです。

中でも、紹介した耳環はていねいに作られた中細の優品です。出土資料の多くに緑青（ろくしょう）（銅が酸化することで生じる錆（さび））や金の剥（は）がれが認められるのに対し、それらがほとんど見られず鮮やかな黄金色を保っていることは稀有（けう）な存在といえるでしょう（近隣市町では、たつの市新宮町の上笹12号出土資料・揖保郡太子町の上太田２号墳出土資料など、ごくわずかな例しか知られていません）。

今回紹介した構谷２号墳出土装身具は９月から当資料館常設展（2階）で展示していますので、ぜひご覧ください。

※　鍍金技法

地金になる銅を酢酸（さくさん）で洗います。それとは別に水銀（朱（しゅ）の原料でもあった辰砂（しんしや）を製錬して作る）と金箔か金粉を用意します。この水銀と金を混ぜ合わせて作った化合物は白銀色をした物質で、金アマルガムと呼ばれています。この金アマルガムを銅の地金の上に塗り付け、350度以上に加熱すれば、水銀が気化・蒸発して地金の上に金の被膜ができあがります。

〈参考文献〉

高田博文1960「弥生式文化時代・古墳文化時代の相生」『相生市史』資料編（第2集）（相生市教育委員会）

中濱久喜2018「陸・構谷２号墳出土須恵器」『れきみん　資料館だより』Ⅲ－12（相生市立歴史民俗資料館）

松本正信2005「金めっきの話」『あいあいの町史話~揖保川歴史散歩~』（揖保川町）

（中濱久喜）